人間科学研究　Vol.32, No.1（2019）

博士論文要旨

# アメリカにおける日系人差別とユダヤ人
## －1906年から1988年を中心に－
## American Jews and Discrimination against Japanese Americans, 1906-1988

駒込　希（Nozomi Komagome）　　指導：森本　豊富

### 研究の背景と目的

これまでのアメリカのユダヤ人とほかのエスニック集団との関係史は、アメリカ東部や南部のアフリカ系アメリカ人との関係、その中でも特に、公民権運動とのかかわりを中心に語られる傾向にあった。一方、アメリカのユダヤ人と日系人の関係についての研究は限られており、それらは、第二次世界大戦中の日系人の強制収容に対するユダヤ人の反応に焦点をあてる傾向にある。先行研究では、ユダヤ系の新聞や団体が、第二次世界大戦中の日系人の強制収容に対し賛否の態度を示さず、新聞や議事録において日系人に関する言及を意図的に避け、「沈黙」（Silence）を貫いていたことを指摘している。本研究では、アメリカの日系人にかかわる差別へアメリカのユダヤ人がどのような反応を示したのかという観点から両集団のかかわりを考察した上で、アメリカのユダヤ人と日系人の関係史をアメリカのエスニック関係史に位置づけることを試みた。

以下に研究内容を章立てにより記す。

### 序章　はじめに

序章では、アメリカのユダヤ人ならびに日系人に関する研究動向と課題の整理を行った上で、本研究の目的、視角、研究方法、そして、枠組みについて言及した。

また、不正義や不平等といったものに対する反応にはリベラリズムという概念が密接にかかわっている。よって、近年のユダヤ人のリベラリズムをめぐる議論を整理した上で、その枠組みについて言及した。

### 第１章　アメリカのユダヤ人と日系人

第１章では、議論の前提として、統計資料や既存の研究を手がかりにアメリカのユダヤ人や日系人の特徴を詳説し、アメリカ社会におけるかれらの位置づけを概観した。アメリカへ流入したユダヤ系移民の多くは、東部の大都市、その中でもニューヨークに集中し、比類なき社会上昇を遂げた。また、東部ほどの人口の集中はなかったが、アメリカ西部のユダヤ人もまた著しい成功をみせた。一方、人口の大部分がアメリカ西部に集中した日系人は、移住後、激しい排斥にさらされ、それは、第二次世界大戦期の強制収容へとつながりをみせた。

### 第２章　20世紀前半のカリフォルニア州のユダヤ人と日系人

第２章では、カリフォルニア州で発行されていたユダヤ系新聞である『エマニュエル』（*Emanu-el*）、『ブネイ・ブリス・メッセンジャー』（*B'nai B'rith Messenger*）と日系新聞である『日米新聞』、『羅府新報』、『新世界』の検証を通じて、1906年のサンフランシスコ日本人学童隔離事件（Segregation of Japanese Children in San Francisco）、1913年外国人土地法（California Alien Land Law of 1913）、1924年移民法（Immigration Act of 1924）に対するユダヤ人の反応を考察した。ユダヤ系の新聞記事からは、これらの不正義に対しリベラルな活動を行うユダヤ人の姿を確認することはできなかった。一方で、ユダヤ系の新聞には地域の白人集団が日系人に向けていたような激しい排日感情を露わにする記事は見受けられず、ユダヤ人の日系人に対する反応は、地域の白人集団の反応とは一線を画すものであったといえる。また、日系の新聞記事には、西部で白人としての地位を享受していたとされたユダヤ人が、アメリカ国内で激しい反ユダヤ主義にさらされている実情が描かれていた。

ホワイトネス研究では、白人として境界線上に置かれた集団が他集団との差異を強調することで自分たちの白人性を主張したという報告がなされている。検証を通じ、ユダヤ系の新聞内にユダヤ人による日系人との差異の強調ともとれる記事がいくつか見受けられた。また、ユダヤ人のリベラリズムに関する研究では、アメリカ社会におけるユダヤ人の白人性とかれらのリベラルな活動との間には関連があったとし、南部で迫害されていたアフリカ系アメリカ人に対し白人性の保持のために、リベラルな活動を行わなかったユダヤ人がいたことが報告されている。このことから、当時のカリフォルニア州のユダヤ人の白人性には揺らぎがあった可能性を指摘することができる。一方で、日系新聞には、アメリカ国内で迫害されながらも生き抜いているユダヤ人を手本とし、アメリカ社会で上昇しようとする日系人の言説がみられた。当時の日系人にとって、ユダヤ人はアメリカで生き抜くためのロールモデルの役割を果たしていた可能性があることをここでは指摘することができる。

### 第３章　第二次世界大戦期のユダヤ人と日系人

第３章では、カリフォルニア州で発行されていた日系新聞である『日米新聞』ならびに『羅府新報』の検証を通じて、第二次世界大戦期の日系人にかかわる差別へのユダヤ人の反応を考察した。先行研究では、ユダヤ系の史料分析を中心に強制収容に対するユダヤ人の意図的な「沈黙」を検証しており、日系人にかかわる差別へのユダヤ人の真の反応や行動を検証するためには日系側の資料の分析が必要であった。日系新聞の検証を通じて、第二次世界大戦期に、外国人登録法（Alien Registration Act of 1940）に反対する集会やマイノリティの権利を擁護するための活動などの場に両集団が居合わせ、ともに活動していたという事実を確認することができた。ユダヤ系の新聞や団体の議事録において、日系人に関する言及を避け「沈黙」を貫いていたユダヤ人が、外国人登録法などに反対する集会の場で日系人と接触があったことは注目に値する。このような人種や宗教を越えた活動、そして市民的自由を重視した活動は、この当時のアメリカ社会への順応を基盤としたユダヤ人のリベラリズムの特徴であった。また、日系新聞のユダヤ人に関する記事の分析を通じてみえたのは、アメリカ国内外における激しい反ユダヤ主義であった。そして、そのような反ユダヤ主義を目の当たりにした日系人は、その不正義を非アメリカなるものとし、民主主義の名のもと、明確に批判していた。日系人にとって、反ユダヤ主義と闘うことは、日系人に向けられていた差別と闘うことでもあったのであろう。そのような観点から、第二次世界大戦期のユダヤ人と日系人は、不正義をなくすために活動する共闘関係であった可能性を指摘することができる。

### 第４章　アメリカのユダヤ人と1952年移民国籍法

第４章では、アメリカ議会の公聴会資料とユダヤ系団体の議事録の検証を中心に、1952年移民国籍法（Immigration and Nationality Act of 1952）に対するアメリカユダヤ人会議（American Jewish Congress）ならびにアメリカユダヤ人委員会（American Jewish Committee）の反応を考察した。アメリカのユダヤ系団体は、日系人を含むアジア人への帰化権の付与に対し賛同の意を表明するも、1952年移民国籍法にかかわる法案に含まれた国別割当、帰化市民や外国人に対する差別的な条項には反対の意を表明していた。特に、移民法における国別割当に関しては、第二次世界大戦の影響で難民と化した南・東欧の人びとを救済するために改正が必要であったことから、その改正のために精力的に活動するユダヤ人の姿を確認することができた。1952年移民国籍法にかかわる法案に反対の意を表明する際、ユダヤ系の団体はアメリカニズムの概念を利用し「非アメリカ的」や「アメリカの伝統に矛盾」といった言葉を用いて対抗していた。ユダヤ系団体によるこのような行動は、この当時のアメリカ社会への順応を基盤としたユダヤ人のリベラリズムの特徴である。日系人は、帰化権と日本人移民の国別割当を希求し、移民法の改正のために活動していたが、日系人が支持した法案には南・東欧からアメリカへの移住を希望する人びとにとって不利な国別割当、帰化市民や外国人に対する差別的な条項が付随していた。ユダヤ人はこれらの条項が修正された法案の支持を表明したことから、結果として、日系人とユダヤ人との間には事実上の対立構造ができていたことを指摘することができる。

### 第５章　アメリカのユダヤ人と日系人の戦後補償運動

第５章では、アメリカ議会の公聴会資料の検証を通じて、市民的自由法（Civil Liberties Act of 1988）に対するアメリカユダヤ人委員会と反名誉棄損同盟（Anti-Defamation League of B'nai B'rith）の反応を考察した。公民権運動後、ユダヤ人のリベラリズムには変化が生じた。それまでのユダヤ人は、アメリカ社会に順応させたリベラリズムを優先していたが、公民権運動後にリベラルな活動を行う際には、より直接的にユダヤ人コミュニティの利益を主張するようになった。しかし、市民的自由法にかかわる公聴会資料の検証を通じてみえたのは、戦時民間人転住・収容に関する委員会（Commission on Wartime Relocation and Internment of Civilians）の設置を支援し、市民的自由法に賛成の意を示す証言や意見書の提出を行うことで、日系人の戦後補償運動を全面的に支援するユダヤ人の姿であった。そして、日系人側もそのようなユダヤ人の支援を認識しており、公聴会資料の分析からは、強制収容体験を通じた両集団間の親密な関係というものが垣間みえた。

### 終章　アメリカのユダヤ人と日系人の関係史

アメリカのユダヤ人とほかのエスニック集団の関係史については、アフリカ系アメリカ人とのかかわりに関するものが構築されている。これまで、両集団の関係については、ユダヤ人によるアフリカ系アメリカ人の公民権獲得のための活動に着目する傾向にあったが、近年では、両集団間の亀裂や限界などに焦点をあてた研究が蓄積されてきている。同様に、本研究での検証を通じてみえたのは、日系人に対してもまた、ユダヤ人のリベラリズムは必ずしも無条件に向けられたものではないということである。一方で、ユダヤ人と日系人との関係は、ある種の共闘関係にあったのではないかということを指摘することができる。それは、アフリカ系アメリカ人との関係のような長期間にわたる組織立った連携ではない。しかし、日系人にかかわる差別へのユダヤ人の反応を考察してきた中で、20世紀前半から第二次世界大戦までの日系人による反ユダヤ主義へのまなざし、そして1952年移民国籍法から戦後補償運動をめぐる両集団の最終的な目標には共通点も見いだせた。